

鬼の「変身」―(舍利)の構想―

小田 幸子

寛正五年(西暦十一月九日、仙洞において六十七歳の音阿弥が演じ、人々を「老而益健也」と驚嘆させたエピソードを持つ(蔭涼軒日録)。(舍利)は、能作の歴史を考える上で重要なポイントに位置すると思われる。観世信光を頂点とする風流能時代には、(大会・善界)など天狗の能や鬼退治物など、鬼や異形物が激しい戦いの末に敗北する能が盛行したが、(舍利)はその先駆的作品とみなされる(山中玲子氏、作品研究「大会」、『観世』昭和62・12)。天女が折り取った桜を、泰山府君が追いかけて取り戻す世阿弥作の(泰山府君)にヒントを得ているかもしれないが、曲趣が全く異なる作品に仕上がっている。

小稿で問題にしたいのは、中入段のシテの「変身」の趣向が与えた影響である。(舍利)の前場はクセ(居クセ)までは夢幻能の定型通り進行する。ところが、クセが終わったところで、激しい嵐と稲光が来襲する。いぶかるワキに、「昔の執心、疾鬼が心、猶此舍利に望あり」と正体を明かしたシテは「面色かはれる鬼と成」り、「舍利殿に飛あがり、くるくるくると、見る人の目をくらめて」舍利を取るや、「天井を蹴破り、虚空に飛んで」姿を消す(室町末期観世流の「一番綴松井本」による)。寛永頃の『観世流仕舞付』をみると、「台へあがり、一ツニツ廻り、扱碁をとつ(て)、……とくと拍子ふむ。とんでおり、シテ柱ノ前ニテ仕留て入。しとめずに直にすらくくと入もよし。又、碁のす多物をけちらして、其ま、入様にもするか」と、色々な仕方があったらしいが、江戸後期には、一旦橋懸りまで行つて「キリ、ト廻り、頭取、上ヲ見廻」してから舞台上に走り入り、刻拍子を踏んで「台ヲ見テ走り行、飛上り、ニツ廻り」、舍利を取つて立つと「右ノ足ニテ三宝ヲミワリ、右へ飛開、横ニシテ飛ヲリ、走り入」(観世流「能附」と、スピードと荒事を組み合わせた効果的演技へと洗練を遂げていたようである。

世阿弥時代以前の夢幻能の中入段は、シテの素性を明かして(または暗示して)、後場への期待をつなぐ機能を持っている。シテは登場時点から普通の人とは多少態度や様子が異なっているとか、昔物語終了後に不審を抱いたワキが名を尋ねたりもする。しかし、シテの様子が激変したり何か特別な事件が起こったりはしない。前場の中心はクセであつて、中入段はその雰囲気を受けつぎ、予感をはらみながら静かに終わる。ところが(舍利)では、シテの正体明かしと後場への期待という機能は同一ながら、前場の中心たるべきクセを押しつけて一番の見せ場を形成するほど突出しているのである。中入段直前までは完璧な夢幻能であり、しかも、宗教的なしみじみとした趣が漂うだけに、均衡を破るシテの変貌と場面の激変は、はじめて見る者に大きな驚きを与えたのではないだろうか。そして、後場は、異類同士の空中戦が宇宙的スケールで展開し、エネルギーッシュな演技の生み出す興奮に舞台は包まれる。

如意宝珠を拝した女(実は寵女)が宝珠を奪つて水中に消え、後場で帝釈天が取り戻すという信光作の(太施太子)は、全体の構想を(舍利)に学んでいよう。夢幻能の完備形式を前場に備えていない場合も含めれば、中入直前にシテが突如変貌して正体をみあらわし、同時に演技上の見せ場を形成する作品は鬼能に数曲ある。(土蜘蛛)(僧形の土蜘蛛の精が

頼光めがけて蜘蛛の糸を投げかける)、へ雷電(菅丞相の霊が鬼の如く変じ、ザクロを噛み砕いて妻戸に吐きかけ火炎を生ずる)、へ大会(山伏姿で現れた天狗が、木の葉を吹き上げ空に飛んで消える)、へ鉄輪(復讐のため生きながら鬼に変じること願った女の様子が激変する)、へ大木(伐採を拒む大木の精が仙人の姿で現れ、気色を変じて飛翔する)などがそれである。また、主として舞の変化によって女の変貌を示す(紅葉狩)や(道成寺)も含めてよいだろう(舍利)と(道成寺)のかかわりについては、山中玲子氏が論稿を予定されている由である)。これらの能の初出記録はいずれも寛正五年以降であり、(舍利)以前に同様な構想を持つ作品はみあたらない。へ葵上)でもシテは小袖に向かって扇を投げつけ、ぱっと上着を被いたりするが、これは後代の演出と考えている。

天野文雄氏は、(舍利) (雷電・大木)もの前シテが古くは童子姿であったことを論じている(『能の童子』、『観世』昭和55・3(4)が、その場合、神秘的雰囲気を持ただよわせながらも、それまではただの少年としか見えなかった人物が、にわかには外見とは裏腹の恐るべき鬼の本性をかいまみせることになる。外見の印象と激しい演技との落差も見所であったと思われ、現行のように怪士系統の面を掛けた

のでは(金春安照の装束付に既に採られている演出)不気味さが表面に出過ぎてしまつて、変身の効果は薄い。なお「一番綴松井本」では、クセの前にシテが正体を明かすが、下掛り最古の「遊音抄」には無い文句で、原作の文句か否か疑問である。

(舍利)の前シテは人間の霊ではなく、変化の者が普通の人間の姿に化けているのだから、正体明かしの場面が人間の霊の化身と同じであつては物足りない。そこで、人間の姿をしたまま、鬼にふさわしい演技をみせようというのが、発想の出発点にあつたのではなからうか。その意外性や演技的面白さが受けて、他の鬼能に応用されたのだろう。とりわけ、美女が中入前に鬼相を現じる場合など、抜群の効果が期待される。

(舍利)の構想は、夢幻能の形式を借りながら全体としては現在能に仕立てる風流能時代の鬼能の典型がいかにして形成されていったのか、その一端を示すかのようである。また、前シテの変貌は、観客の目前でみるみるうちに人物が変わつてしまふ類の変身であり、その意味で、(大会)の後場にみるような「早変り」の演出とも関連するだろう。変身をどのように表現するかについても、新しい発想や方法が生まれてきたことが感じられる。(聖徳大学助教授)